

市芦救援会通信

市芦救援会通信 〒659 芦屋市剣谷9 市芦分会気付 0797(32)1131
89/5 通巻29号 (1部100円) 市芦救援会 発行人 玉本 格

第18回審理 7月1日(土)AM10~12 前田証人反対尋問

処分者側前田証人の審理逃亡を許さず 強制配転人事の不当性を追及しよう

市芦救援会事務局

五月二〇日に予定されていた第十八回公開口頭審理が、その直前になって処分者側前田証人の「用務」との理由で一方的に延期になりました。前田は市教委指導部長退職後、神戸市内の予備校教師として再就職しています。この間、きびしい反対尋問が続けられる中で、とうとう音を上げていたともいいます。

この間の反対尋問で、前田は次々と自からの不当労働行為性を証言せざるを得ないところに追い込まれてきています。松本教育長着任後、組合つぶしのために次々と職務命令による校務運営の独裁化をはかり、職員の当然の民主的協議の要求の前には、「私は禁治産者だ」との居直りを続けてきました。

しかし、入試・人事等において、松本教育長の手先として動いた事実を追及される中で、「異例な人事」「教員大巾削減後の現場の影響も協議せず」等の、「異常事態」を証言せざるを得なくなっています。

市芦校長から市教委指導部長へと「昇任」はしたものの、つまるところ松本の手先として使われ、その役目が終わるや、体よく捨てられており、井上校長の山手中学への転任もふくめ、松本教育長の人使いのえげつなさが、一層明らかとなっています。学校現場を混乱させるだけの「教育改革」の本質がここにも表われているといえます。

次回審理から六人の強配人事に関してその不当性を徹底的に追及していきますので、引き続き多数の方々の傍聴参加をお願いします。

も／く／じ

処分者側前田証人の審理逃亡を許さず強制配転人事の不当性を追及しよう

市芦救援会事務局	1
芦屋市学級審答申批判 生徒切り捨ての促進をはかる答申	2
特集「麦の家」設立一周年記念コンサート	4
どこからか集まってきて、そして	5
山崎 薫	5
芦屋市行政糾弾会に参加して	6
市芦分会	6
活動日誌〈抜粋〉	6

答申は、「新しい国際高等学校の概要」の中で、「国際交流できる専門知識と技術を育てる教育」、「国際的な企業への進路拡大」など述べているが、およそ「国際的」という言葉を繰り返せば、何となくを認識しえたかのような、無内容な答申である。

およそ高校教育の現実に対しての一片のリアルな認識もなく、認識しようとする姿勢もない。まして、高校教育への歴史的省察など

おそまつな国際社会認識

(4)は就学困難な生徒の切り捨てであり、(5)は二年間に一度も職員会議を開かないという校長独裁体制であり、これらを「今後も推進せよ」との答申を出しているのである。

まさに「松本教育改革」が、組合弾圧・生徒切り捨てでしかなく、「非教育的」なものでしかない、多くの市民の批判をあびている時、この答申は松本教育長を擁護するためだけの、政治的なそれゆえまったく教育的自身の無いものとして提出されている。

委員が引用した臨教審答申ですら、全国の高校における大量の中退者の存在を無視することができず、「教育内容の調査研究を進める」ことを明記している。学教審委員は市芦における生徒切り捨ての実態にこそ目を向け、その克服への方途をさぐるべきなのである。

芦屋市学教審答申批判

生徒切り捨ての促進をはかる答申

市芦救援会事務局

「英語」といえば「国際化」になる答申

去る四月一四日、芦屋市学校教育審議会（以下学教審と略）は、市芦を将来国際高校にするよう答申した。

「国際化社会にふさわしい高校」との「構想」は、「外国人講師による英会話重視」、「コンピュータ・芸術教育重視」と、リクルート情報誌に載る専修学校の宣伝文句のような言葉が羅列されている。臨教審答申芦屋版としてはおそまつ極まりないしろものです。公立高校としての、市民の子弟を等しく教育する上での課題は何か、などという視点は一切なく、今はやりの「国際化」に名をかり、英語といえは「国際的」であるかのような低俗きわまりない答申である。

松本教育長のやらせの「諮問・答申」

昨年、「これからの芦屋市立高等学校のあ

り方について」という諮問がなされた。その理由の中で「国際化、情報化が進み、高等学校においても、多様な教育の展開が求められている社会情勢の中で、今や、生徒の能力、適性、進路、関心等に応じた適切な指導が困難な状態にあります」とある。

しかし、「適切な指導」を困難にしたのは、松本教育長自身ではないのか！諮問前の二年間で、

(1)入試での定員内大量不合格（中卒者の進路を閉ざす）

(2)教師を一挙に十一名も削減、教育条件を大幅に低下させ、生徒実態に応じた授業・進路指導等の全校的とりくみを崩す。

(3)「生徒指導の強化」と称して、大量の生徒を中途退学に追い込む。

このような「松本教育改革」の「教育破壊」を不問に付し、一層の「改革断行」を「正當化」させるための諮問として、はじめから意図されていた。このことはたとえば、審議委員の人選にもよく表れている。

「教育問題」Ⅱ「組合対策」として、常に松本教育長の「親衛隊」として行動してきた悪名高い「教育をみつめる会」の主要メンバーが元PTA役員という肩書を利用して選ばれている。他方では、教育現場を代表する者は誰一人として審議会には参加していない。こういうのを世間では「やらせ」というのである。

「調査もしていない」とうそぶく審議会会長

「今の市芦を母体として望ましい高等学校づくりをすることが最も現実的、合理的である」と答申しながら、市芦の現状と問題点については、「時間がなく調査していない」と会長が平然と語るなど、全く無責任な答申であることが明らかである。しかし、調査もしない答申で、

(1)人事の刷新

(2)多様な教育課程の実施による教育内容の充実

(3)生徒指導の徹底

(4)兵庫県公立学校入試選抜要綱に基づく適正な入学選抜の実施

(5)校長を中心とする学校運営の正常化

と、「松本教育改革」をそのまま追認している。実態調査もせず、このような権力的行為、即ち(1)は組合員の強制配転を示し、(2)は

一切ない。

教育長に名を借りて、公立高校をのっとり、「松本私学」の創設を企てる答申ではあって

「神戸新聞」一九八九年四月十五日

市芦屋高を国際校に

市教育審が教委に答申

英会話学習に重点を

芦屋市学校教育審議会（以下学教審と略）は十四日、市立芦屋高校を英会話学校を中心とした外国語教育重視の「国際高校」にするよう市教育委員会に答申した。

同審議会は、昨年五月、市教育委員会から「これからの市立高校の在り方について」諮問を受けた。しかし、市内に市立高校は市芦しかない

ため、進学保障や定員割れ（口減量）は十四日、市立芦屋高校を英会話学校を中心とした外国語教育重視の「国際高校」にするよう市教育委員会に答申した。

同審議会は、昨年五月、市教育委員会から「これからの市立高校の在り方について」諮問を受けた。しかし、市内に市立高校は市芦しかない

「麦の家」設立一周年記念コンサート

市芦救援会事務局

前号でお知らせしておりましたコンサートが、市民・教師・生徒・親そして多数の障害児（者）の方々、約三百人の参加で成功しました。車イスの人々を人力で会場に迎え、送るという作業に多くの人々の協力があり、岩崎議員も黙々と手伝っていました。

寄せられた感想の中で、元市芦保護者の山崎さんは、視力がおちる状態の中でテープに吹きこんで下さいました。今後とも多くの人々の支援のもと、「麦の家」が発展されますように、共にがんばりましょう。

仲間で支えた一年間

「麦の家」事務局

一年前、二人の障害児が市立芦屋高校の入試で落とされ、行き場を失ったことから、仲



間で支え合う場をつくらうと、この「麦の家」をつくった。何にもない所からのスタートで、会員を募ろうと走りまわる。それだけではと、障害者や親がパン・牛乳・日用品などを宅配

しながら、これも地域とのつながりになると、一軒一軒まわる。週に二度の宅配とはいえ、注文・仕入れ、配達と大変でした。

この一年をふりかえって、家族ぐるみでつき合える仲間ができ、支え合い、助け合い、どんな小さいことでも一緒に考えることができたことが、なによりの財産になったと思います。そんな一年の歩みをなにか表現したいと思いついたのが、記念コンサートでした。

出演者に、心あたりの人々をお願いして、出演料はないに等しい程ですが、それでも「ヨッシャ」という返事でスタートしたのです。市や市教委や社会福祉協議会の後援もとることができ、組合関係にも応援してもらい、また何よりもうれしかったのは、市内の多くの障害者や親たちに出会えたことでした。当日、六時半頃から次々に入場者がふえ、ついに三〇〇人も人々で会場が埋まりました。一曲一曲が終わるたびに拍手が鳴りひびき、手拍子が重なり合って、すばらしい雰囲気を感じました。

ただ、ルナ・ホールは外観はとてすばらしくみえますが、車イスのエレベーターやスロープもなく、事前に何度も福祉事務所とかけ合い、セリを使う事になりましたが、あとは皆で運ぶという事になりました。多くの人

達の手助けで成功したといえます。

ご支援・ご協力下さった方々に厚くお礼申

どこからが集まってきた、そして

山崎 薫

私は時間におくれて途中から入っていった。この会場にして充分格好がつく程度の人数の人が座っていた。

家を出る時思っていた。「ルナホールやて、また大きいでもんやな、二〇一か三〇一号室ぐらいが丁度ええんとちゃうんかいな、大丈夫かいな」私は何もしていない傍観者のくせして、余計な心配をしていた。

ところが、「麦の家」はこの一年の間にすごい熱気でもって進められていたのであった。おそろおそろ「麦の家」をのぞき見している私なんかには、なんかはげましてくれている感じ。

コンサートの第一部は楽器のソロ演奏もあって、これはお互いに愛で手を結ぼうとの表現であって、「なんてガラでもない」、「無理して」と思ったりして、次に「えんぴつの家」の玉本先生の話がかった。「えんぴつの家」は、その実績から法人化されたそう。土の上に芽を出し、社会の光があたってきたということ。 「麦の家」もいま土の中で、一生懸命成長

し上げます。今後ともよろしく願います。

「麦の家」のスタッフは、生々しい生活現場から、生々しい教育現場から湧き出た人ばかりで構成されている。言葉でつじつまを合わせるだけの人間なんて一人もない。だからのびる、だから成功する、やろうや！

存分に生きようとする

人々の群れがあった

市芦卒業生 前田 拓

私が「麦の家」一周年記念コンサートの事を知ったのは、市芦に遊びに行った時に大角先生から、「今度コンサートをするから、来れたら友達も呼んで来てくれ」と言われ、ポスターをもらったのです。友達にもいろいろ声をかけました。

当日、三百人も人が来ているのを見て、おどろきと感動が胸の中を駆けめぐっているような気持ちになって、何ていうかわれしく

なりました。

私は小さい頃から障害者の人達とバレーボールをしたり、時には誕生日プレゼントをもらったりして、だからというか、なんとなく障害者の人に会うと、ずっと前からの仲間に会ったような、そんな気持ちになるんです。だからこんなにたくさんの人達が集まるのを見て、やったねと思いました。

コンサートは思っていたよりも楽しく、中でも田辺先生のサッチーギャングのテネシーワルツやスタンドバイミーが、私の大好きな曲で、他の曲もよかったです。なによりおどろいたことは、田辺先生があんなに歌がうまいということでした。なかなかかっこよく思えました。

車椅子の多々良誠さんの曲は、胸にジーンとくるような曲と元気の曲のような曲があり、そこのアイドルと比べたらとてもいい声です。この人の歌をいろんな人達に聞かせてあげてやりたいな、そしたらきっと障害者のことを差別したりしないだろうし、ヘンナ人みたいな見方もしなくなると思います。

本物のクラシックギターリスト宮平嘉男さんの曲を聞いた時、「さすがはプロ」と思いました。とても気持ちが落ちつききました。

「麦の家」一周年を祝うために、市芦の卒業生や多くの人が集まったことはとてもすばらしいことだと思います。

芦屋市行政糾弾会に参加して

市芦分会

被差別部落への芦屋市民の差別・迫害はすさまじい。芦屋市や芦屋市教委の行政姿勢が市民の差別意識をおり、被差別部落への敵対行動へ駆り立てている。そのことが、子供や親の話を通して明らかになってくる。

市長や教育長へ向けられた話は、同席する教師を突き刺して行く。息をつめて聞く瞬間がある。

小学校・中学校で何度も差別を身に受けながら、何とか持ちこたえて入学してきた市芦でもまた、差別事件の当事者とならなければならなかった子がいる。

差別事件の当日、子どもは一人家で震えながら母親の帰りを待った。仕事中連絡を受けて、不安を払いきれない母親は職場から家に電話をかけた。「すぐ帰ってきて欲しい」という子どもの声が耳に飛び込んでくる。仕事を途中で休んで、すぐに家に帰った。母親は泣く娘を抱きしめて懸命に励ましたという。

「何度も差別をくぐり抜けてきた子だから、大丈夫だろう」と思っていた。でも差別は何度受けても重い」と母親はいう。

差別事件の翌日から、その子は市芦に通った。帰ってきて、明日もつけずベッドにうつ伏せて、身動きもしない子どもを見て、母親は「生きてほしい」と必死に願ったという。

自分たちが受けた差別を、子や孫までが今もまだ受け続けなければならないのが、たまらなく許せないという。「差別が子どもを潰していくことを許しておくわけにはいかない」というのが被差別部落の大人たちの共通した思いであったように聞こえた。

母親は担任を呼んで、一連の思いを丁寧に伝えたと聞く。そして、母親は、学校や担任や差別した子への怒りを胸のうちに飲み込んで、「先生、絶対に差別した子をやめさせんといてよ」「差別した子もちゃんと面倒をみてよ」とま

で言っている。それに応じているのか、それはすべて学校の仕事であろう。

「学テ反対一千人集会」 抗議のデモ隊 市教委を包囲

市芦分会

活動日誌へ抜粋

1989.4.17～5.15

学力テスト反対集会は、兵教組本部の開会の挨拶で始まった。最近の芦屋の教育委員会はキナ臭いにおいがする。その典型が、市芦の強制配転と学力テストだ」という民主教育を進める県民連合、県総評、芦屋地労協など芦教組の闘いを支援する団体からの激励の挨拶のあと、デモ行進に移った。

市芦分会は芦教組の隊列に加わった。デモ隊は市教委前で「学力テスト反対」「管理強化を許さないぞ」「子供のための教育を行え」「教育の条件整備を行え」等のシュプレヒコールを行い、完全に市教委を包囲し、盛り上りを見た。市芦分会は、今後とも芦教組と連帯して闘いを進めます。

- | | | | |
|------|--|-----|---|
| 4・17 | 麦の家事務局会議 | 5・1 | 芦屋地区メーデーに参加。 |
| 18 | 芦教組学力テスト反対決起集会に参加。全県下一千人の兵教組・労働者が市教委を包囲デモ。 | 9 | 事務局法対会議。 |
| 19 | 同盟公判傍聴。事務局会議 | 10 | 「麦の家」一周年記念コンサート。三百人余の市民・教師・親・多数の障害者・児が参加。 |
| 20 | 第二回市政糾弾会に参加。 | 11 | 法対会議。 |
| 21 | 分会拡大闘争委。 | 13 | 市芦分会の新執行部選出。 |
| 25 | 事務局法対会議。 | | |
| 28 | 第三回市政糾弾会に参加。全 | | |